

早稲田大学 法学部 古典 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	90分（古漢1問、現代文2問）
出典	『とはずがたり』
解題	1306年頃成立の日記文学。作者は後深草院二条。本文は後半の巻五より。

〔大問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
一	問一ノ一	文法(係り結び) ：波線 a 「らむ」直下に「と」がある。ゆえに「らむ」で心内文の文末となる。	易
	問一ノ二	内容把握 ：前行「住み馴れ～」にある。	標準
	問一ノ三	主語補充 ：「召す」は「乗る」の尊敬語。御所から退出しようとした遊義門院が車に乗った。	標準～やや易
	問一ノ四	内容把握 ：「数ならぬ身」は筆者自身のこと。直前「かたみの御心ざし、さこそと思ひやりまゐらす～」と、筆者は亡き女院とその娘との心情を「思ひや」っている。	標準
	問一ノ五	内容把握 ：文中にも出てくる「今は」には臨終の意がある。	易
	問一ノ六	【I】 古文中の傍線 X と対応させればよい。「朝」は「朝政」にあたると考えればよい。 【II】 ⑤句「後宮には三千人もの美人がいた」 ⑥句「(楊貴妃だけが天子に愛され、) 三千人分の寵愛を妃が独占した」 「幸」には「かわいがる」の意味があり、「ラルル」と続くので「かわいがられる」と解釈する。 【III】 「非徒」は「ただに～のみにあらず」・「ただ～だけではない」。	標準

〔総合コメント〕

<p>高校の教科書にはまず必ず採用されているであろう『源氏物語』「桐壺」で、更衣が死に際して、死の穢れを避ける為に内裏を退出する場面がある。それを讀んだことがある(知っていた)か否かで、本問題文の理解度に差が出たであろう。単語・文法を習得するのは最低限のこと。教科書や受験に頻出する作品等にできるだけ数多くふれ、古典知識を広く得る必要がある。</p>
